

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

## \* 国を語るときのことば \*

深草 真由子

小学館『和伊中辞典』(第2版)で〈国〉という項目をひくと、国家の意味をもつ単語として paese と stato、そして nazione の三つがでてくる。

このなかでもっともよく使われるのは一つ目の paese だろう。「旅行である国に行ってみたい」とか「自分の国ではこうだ」というかんで、気軽に使える言葉である。この単語と paesaggio(風景)という語がリンクしていることもあり、paese と聞けば、その土地の風景やそこに住んでいる人々の顔が浮かんでくるようなところがある。

二つ目の stato もよく使われるが、paese にくらべると使用範囲はずっと限られている。『和伊中辞典』に例としてあがっている *intentare causa allo Stato*(「国を相手どって訴訟を起こす」という表現からも分かるように、制度、システムとしての国のことであり、しばしば大文字を用いて Stato と書かれる。

さて、わたしが今ここで問題にしたいのは三つ目の nazione についてである。『和伊中辞典』には、使用例としてこんな文と訳があがっている。

Di che nazione è? 「お国はどちらですか」

Sono giapponese. 「日本です」

しかし、役所の手続きなどで国籍をきかれるときは

Di che nazionalità è?

という表現が使われるように思うし、また、初対面の人との会話のなかで出身地を尋ねるのであれ

ば、相手があきらかに外国人であっても、わざわざ〈国〉という語を持ちださないで

Di dove è?

Da dove viene?

と言うのが一般的ではないだろうか。〈国〉という語がどうしても必要だというならば、わたしなら nazione ではなく paese を使って

Qual è il Suo paese?

とするだろう。(単語それぞれのニュアンスや使い方について関心のある方は、イタリア語の先生に尋ねてみてください。)

ふり返ってみれば、わたしは nazione という単語を使ったことがほとんどないと思う。記憶にあるかぎりでは、国際連盟(Società delle Nazioni)に触れたときだけではないだろうか。国際連合(Organizzazione delle Nazioni Unite)は ONU で通じるし…。最近ではサッカーの国別対抗試合でネーションズリーグというのをやっているけれど、これは英語だし…。

というわけで、自分ではほぼ口にしないというよい nazione であるが、こここのところ耳にする機会がいきりに増えている。その理由は「イタリアの同胞」という政党が2022年9月末におこなわれた選挙で圧倒的な支持を集め、第一党になったことにある。

あらたに首相になったのは「イタリアの同胞」の

党首ジョルジャ・メローニである。イタリア初の女性首相が誕生したのだ。若くて小柄な彼女が、ベルルスコーニをはじめとするベテランの男性議員たちを背後に並べて記者会見にのぞんだのを見て、すがすがしい気分になったのはわたしだけではないだろう。これはほんとうに喜ばしい出来事である。

ところがどうしても納得がいけないのは、新首相のことを男性の定冠詞をつけて *il Presidente* (首相)と呼ぶことになっていることだ。EU にも重要な役職についている女性政治家は何人かいるが、彼女たちは *la Presidente* と呼ばれているのだから、イタリアの首相にも女性の定冠詞をつけていいはずなのだが…。



【メローニ政権発足を伝える新聞の第一面】

話を *nazione* にもどそう。じつはこのジョルジャ・メローニが *paese* と言ってもよさそうところで *nazione* を連発する人なのである。メローニが下院でおこなった所信表明の演説のようすをテレビのニュースで見て、わたしは違和感を覚えざるをえなかった。

「今、わたしが背負っている責任のなかには、自分がこの *nazione* ではじめての女性の首相だということがあります。…われわれの目標は、この *nazione* の最良のエネルギーを解放し、イタリア人に、すべてのイタリア人に、より自由で、より公正で、より豊かで、より安全な未来を約束することです。…イタリアは世界のどこよりも景

色や芸術、物語、表現の美しさを象徴する *nazione* なのだから…」

メローニの言葉づかいが気になったので、彼女の SNS のページをのぞいてみたのだが、やっぱりここでも *nazione* がしばしば使われていた。1950 年代に国営石油会社の会長だったエンリーコ・マッテーイの死から 60 年の記念日には、こんな書き込みがあった。

「*Nazione* の復興のためにマッテーイを手本にしよう。エネルギー自給を目指し、世界各国と協力しながら、この国がふたたび地中海における戦略的、経済的な中心になれるように。ちょうどエンリーコ・マッテーイがしたように、われわれももう一度、国益を中心に考えることにしよう。大きな夢を描き、それを実現させるイタリアのために」

もう一つはロシアのウクライナ侵攻をめぐるポストである。イタリアは NATO 加盟国の一つとしてウクライナを支援する側にある。しかし、メローニが連立を組んでいる他の政党に、ウクライナへの武器提供に反対する勢力や、ウラジミール・プーチンと仲のいい有力者がいるために、イタリア政府が立場を変えてしまうのではないかと危惧する声アメリカやヨーロッパ諸国からあがっていた。それへの返答にも *nazione* が使われている。

「われわれが政権をになうイタリアは、欧米の鎖を乱す脆弱な環にはならない。スパゲッティとマンドリンの(筆者注: 軽薄で信用ならない) *Nazione* には決してならない」

メローニ内閣が上院、下院の両方で信任を得た翌日の 10 月 27 日に、文芸評論家のマルコ・ベルポリーティによる “*Nazione*”, *parola del passato* (『“*Nazione*”は過去のことば』)という文章が、日刊紙 *La Repubblica* に掲載されていた。

それによると *nazione* は、フランス革命の時代によく使われるようになり、ナポレオンの軍隊によってヨーロッパ中に広められた語で、絶対王政を打倒してつくられる、国民を主体とした国のことを指した。ナポレオンが没落して旧体制が復活したあとも、革命家のマッツィーニやリソルジメントの愛国者たちがこの言葉でもって、イタリアから外国勢力を追い出し、文化、言語を一つにする国を

つくりあげようと戦った。つまり nazione は、自由と民主主義に根ざした国民国家の形成という理想を熱く語る時に用いられる言葉だったのである。



【アルタムーラ画「フィレンツェの最初のイタリア国旗」】

出典: [https://es.wikipedia.org/wiki/Francesco\\_Saverio\\_Altamura](https://es.wikipedia.org/wiki/Francesco_Saverio_Altamura)

ところが nazione という共同体への志向は、自国が他国よりすぐれていると考えるナショナリズムにつながっていった。第一次世界大戦の原因の一つになり、ファシズムの到来を招いたイデオロギーである。こうした文脈において nazione という語は、階級闘争によって引き起こされる問題をごまかし、人々の関心をよそにもっていきたい権力者に都合の良い言葉になったのである。

ベルポリーティはいう。「Nazione という語をかがけて進められた、民族をアイデンティティのベースにした国民の形成という事業が終わりを迎えてから、すくなくとも 80 年はたっている。今またその単語を使うということは、歴史の針を巻き戻し、深刻な被害をもたらした過去をよびおこすことに等しい。…われわれは 19 世紀から 21 世紀へと歩をすすめ、歴史的な意味においてでなければ、つまり過去に言及するときでなければ、Nazione について語るのをやめるべき時がきたのではないだろうか」。

そもそも、なんらかの明確な意図があってメローニが nazione という単語を選択しているのかどうか、わたしには分からない。しかし言葉というのはそれを口にする人の心を映しだす鏡だといわれる。一体、メローニの政治的インスピレーションはどこから来ているのだろう。

彼女が党首をつとめる「イタリアの同胞」はイタリア語で Fratelli d'Italia という。これは、19 世紀のイタリア統一運動時代の愛国詩人による詩で、国歌の歌詞にもなっている『マメーリの賛歌』の冒頭からとったものだ。政党名は、リソルジメントからきているのだ。

一方、政党のシンボルは赤・白・緑の三色の炎で、これはもともと第二次世界大戦の直後につくられたネオ・ファシスト党のためにデザインされたものである。そのため(というより、そういう理由もあって)「イタリアの同胞」はムッソリーニの思想を受け継いでいる党なのではないか、と一部では疑われている。

疫病に戦争、自然災害と暗い話がつづくなか、積極的に支持してであれ、消去法によってであれ、ともかく多くの人たちが「イタリアの同胞」に一票を投じた。ジョルジャ・メローニの政権がこれからイタリアをどんなく国)にしていくのか、注意深く見守っていききたい。



【ジョルジャ・メローニ首相】

出典: Quirinale.it

(元当館スタッフ)

## イタリアあれこれ④

### \* 通訳ガイドを 3 年やってみて \*

杉 栄子

2020年3月から始まった新型コロナウイルス感染対策としての入国制限が、ついに今年10月、大幅に緩和された。観光地に行けば、外国人観光客の姿も見かけるようになり、インバウンド業界にとっての2年半に渡る長い冬がようやく終わりそうな気配である。

私は2016年度の通訳案内士試験(当時)に合格し、2017年の春からイタリア人旅行者を観光地に案内するガイド業を行っていた。コロナ前までの3年間という短い経験年数ではあるが、実際にやってみて、通訳ガイドを通じて体験したことや感じたことを書いてみようと思う。

通訳ガイドは正式名称を「全国通訳案内士」と言う国家資格である。取得には筆記と口述の試験に通らなければならない。私が合格した2016年度は20%を少し超えるくらいの合格率だったが、ここ数年は10%を下回る狭き門となっている。これを突破すれば、晴れて全国通訳案内士として、報酬を得て、外国人旅行者を案内する仕事ができるようになる、という決まりだった。

「だった」と過去形で書いたのは、実は2018年以降、資格を持っていなくても通訳案内業を営むことができるように法律が変更されたからである。急激に増加した外国人旅行者数に対し有資格者の数が不足している状況に対応するためだったらしい。今も試験は存続しており、合格者だけが全国通訳案内士と名乗ることが出来る<名称独占資格>として残っている。しかし、資格がなくてもガイドとして働くことができるのなら、面倒な勉強は避けたいと考えるのが普通だろう。ここ数年、試験を受ける人数が激減しているのは、コロナ禍で需要が激減したことだけが原因ではないだろうと思っている。

制度の話はこれくらいにして、通訳ガイドが実際にどんなことをするのかについて話そう。外国人観光客とひとこと言っても、団体ツアーだったり、個人旅行だったり色々あるが、私は2名～10名までの少人数のグループを、公共交通機関を使って京都市内へ案内するという1日プランを担当することが多かった。朝、指定された時間に、観光客が宿泊しているホテルへ迎えに行く。合流したら、その日の行程、参加者の体調などを確認し、何も問題なければいざ観光へ出発ということになる。ほぼ全員が日本は初めてという方々なので、金閣寺や清水寺などの有名観光地を巡るのが一般的だ。枯山水が好きな一家と禅寺ばかりを訪問したり、現代アートが好きなカップルと美術館巡りをしたりしたこともあったが、これらは稀なケースだ。



地下鉄やバスでの移動中は大きな声で話せないの、観光地に着いてから色々な説明をすることになる。例えば金閣寺はいつ、誰によって、何のために建てられたのか、どういった特徴があって、何が見どころなのかといった具合である。

自分が通訳ガイドとして仕事をする前は、ガイドといえばバスガイドというイメージを持っていたので、色々な情報を次から次に話し続けなければいけないものと思っていた。だから、見つけれられる限り、思いつく限りの情報は前もってイタリア語に翻訳し、丸暗記していた。しかし、実際に案内をしてみると、ガイドが一方向的に話し続けるだけの仕事ではないということがわかった。なぜなら、何よりもまずイタリア人は聞くより喋る方が好きな人たちで、ガイドによく話しかけてくるのだ。その内

容は様々である。自分たちはどこから来たのか、なぜ日本に来たのか、前日はどこへ行き何を食べたのか。新婚旅行のカップルなら、どんな披露宴をしたか(もれなく写真と動画も見せてくれる)。かと思えば、日本文化にとっても詳しく、日本の漫画やアニメ、日本刀などについて詳しく語ってくれたりもする。なのでガイドはイタリア語を話す力だけではなく、聞き取る力と語彙量も相当に必要である。

そしてもちろん質問もたくさんされる。京都を案内している時によく聞かれたのは、人口はどれくらいかという質問だ。住民の多さ・少なさで都市の規模を把握しているらしい。同じく面積もよく聞かれた。

また、日本人がどんな生活をしているのかに興味があるようで、平均的な月収はいくらか、どれくらいの広さの家に住んでいるのか、家賃はいくらなのか、休日や長期休暇はどのように過ごすのか、年金や保険はどんな仕組みなのか、ということもよく聞かれた。

さらに、観光中に気づいたことや思い出したこともその場ですぐに質問をしてくる。例えば、街中になぜゴミ箱がないのか、犬と散歩している人を見かけないが日本人は犬を飼わないのか、どうして果物がこんなに高いのか、神戸牛はどこで食べられるのか等々あげだすとキリがない。

そして彼らの質問には脈絡がないこともしょっちゅうだ。例えば私が鯉のぼりの説明をしている最中に、今夜は芸妓さんと食事に行きたいのだけど、どうすればいい?などと聞かれたりするのだ。

あまりに話が繋がらないものだから、最初の頃は面食ったし、すぐに答えが出ないような内容のものだとあたふたと動揺したものだった。だが徐々に慣れてきて、今ではどんな質問が来ても冷静に対応できるようになった。それは何でも答えられるようになったという意味ではなく(もちろんそれに越したことはないし、それを目指してはいるが)、知らない内容の場合は、どこかに問い合わせるとかスマホで調べるという対応でも大丈夫だということが分かったからだ。

と言っても、調べてもそう簡単にはわからない質問も出てくる。例えば、二条城を見学した後に、

ところで徳川幕府の最後の将軍は大政奉還することに納得していたのか、内心では嫌だと思っていたのではないかと尋ねられた。正直なところ、それまで考えたこともない質問だった。戦争になることを避けたいと思っていたのでしょうかとか、お茶を濁すような答えしか出来なくて、自分の勉強不足を痛感した。

こんなこともあった。金閣寺に行った時、戦後に放火され全焼したため、1955年に再建されたと説明したところ、「じゃあ偽物だね」とコメントされた。「いやいや本物ですよ」「でも建て直したんですよ?」「そうです」「じゃあ偽物、レプリカじゃないか」というやり取りをして、私はそれ以上どう言えば良いのかわからなくなってしまった。



これは<テセウスの船>という有名なパラドックスらしい。ギリシャ神話に登場するテセウスが乗っていた船は、その後も保存されたが、老朽化した部品を取り替え続け、ついに全ての部品が置き換えられた時、その船は元の船と同じものと言えるのか、という問題である。日本の伝統建築は木造であるため、歴史が古い神社仏閣の建物は、ほとんどが一部または全部を改修しており、創建当時から何も手を加えていないということはまずあり得ない。だからといってそれらが偽物であるとは、少なくとも私は思ったことがないのだが、この感覚を伝えるための適切な表現はまだ見つけられていない。

こういった具合で、思ってもみなかった質問やコメントが投げかけられるので、資格を持っていないがいまいが、通訳ガイドという仕事を続けていくためには、語学力を磨くことは言うまでもなく、

様々な方面に好奇心のアンテナを伸ばして学び続けることが必須だと実感した。

また、私が今まで担当したイタリア人に限って言えば、ガイドと色々なことについてお喋りしながら観光を楽しみたいと思っている人たちだった。だから、歴史や文化の説明をすることに加えて、彼らの人懐っこいコミュニケーションにも臨機応変に対応することが求められる仕事だと思う。

臨機応変に対応しなければならないのは、想定外のことが起きた時もそうである。例えば、参加者が迷子になった、スマホをどこかに置き忘れた、乗る予定の特急が台風で運休になった等々あるが、今までで最も心配になり不安になったことは、参加者の1人の体調が悪くなり、ご家族と一緒に救急車に乗ったことだ。救急隊員とのやり取りから医師の診察、支払い窓口でのやり取りまで、通訳として付き添った。医療関係の知識を持ち合わせているわけがないので、ひたすら辞書をひいて必死に訳した。幸い大事には至らず、イタリア帰国後にすっかり回復されたと連絡を頂き、心からほっとした。

大変だった出来事ばかり書いてしまったが、通訳ガイドはしんどいだけの仕事ではない。観光を楽しんで喜んでいる姿を見られるのは、案内したガイドとしてはとても嬉しいものである。ガイドにとって観光地は職場であり日常の一部になっているが、観光客にとってその場に立つことは人生で初めてのことであり、新鮮で瑞々しい感動を伝えてくれる。これがとても興味深く楽しい。また、最初は日本が嫌いだと言った女性客が、お別れの際に、あなたのおかげで日本を好きになったよと言ってくれた時は、努力が報われた気がした。こうした自分の仕事の成果を目の前で見られるということが、ガイド業の醍醐味かもしれない。イタリアと日本は距離的にも遠く離れており、日本へ来るにはかなりの時間と費用が必要である。来てよかった、その甲斐があったと思ってもらえたら、それこそガイド冥利に尽きる。

最後にイタリア人観光客あるあるネタをひとつ。彼らの生活と切っても切り離せないものにカフェ、エスプレッソコーヒーがある。目覚めの一杯、午前中の休憩に一杯、昼食後に一杯、おやつどき

に一杯、友達と喋るのに一杯、バスや列車の待ち時間に一杯、理由はなくてもとにかく一杯、である。カフェを飲みたい気持ちは旅行中も変わらず、どこに行っても「カフェ？」とガイドに訴えてくる。毎回は難しいが、可能な限りその希望に応えるべく、様々な観光地でカフェが飲める場所を探しておくことが私の習慣になった。



(当館語学講師)

#### <オンラインレッスン随時受付中>

zoom を使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスンです。

受講料や規約はプライベートレッスンに準じます。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: centro@italiakaikan.jp  
URL: <http://italiakaikan.jp/>